

青空白雲

表紙イラスト：秋月からす

# 暴虐の

の

# 名門学院

啜り泣く女教師

試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『暴虐の名門学院 噁り泣く女教師』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



# 暴虐の 名門学院

啜り泣く女教師

青空白雲

表紙 / 秋月からす

二次元ぷち文庫

## 登場人物紹介

### Characters

---

こみやゆり

#### 小宮優理

S学院に赴任してまだ間もない二十五歳の美人英語教師。才色兼備な女性で生徒たちから慕われている。スタイルも抜群で授業中に悶々とさせられる男子生徒が多数いる。

の だ せいじろう

#### 野田誠二郎

いつもジャージばかり着ている五十歳の体育教師。無骨な振る舞いで生徒や教師たちからの評判が悪い。優理を執拗なまでに口説くも、毎回あしらわれている。

あいざわかき

#### 相沢司

優理の大学時代の同期で恋人。大手都市銀行に勤めている。

「では、ここで分詞構文について説明します」

こみやゆうり  
小宮優理は黒板に向かった。

英文をすらすらと書いていく。

「ここでingが主語にかかっています。この分詞は形容詞的な働きをしています……」

黄色のチョークで単語を囲みながら、説明する。

ここは、都内私立S学院高校。優理はこの学校に赴任してまだ間もない二十五歳の若い教師だった。有名私立のJ大学文学部を卒業ののち、S学院に採用された。この学院でも特に目立つ美人教師である。実際、今も教室内の男子生徒たちは熱い視線を彼女に注いでいる。

優理は教壇から教室を振りかえり、説明を続けた。

「というわけで、ここでは○○している誰々という表現になります。関係代名詞などを使うと長くなりますが、分詞を使うと短く、すっきりした言い方にまとめられます」

優理は問題集を開いた。

「では、問題集の三十九ページの練習問題を解いてみましょう。今説明した形容詞用法です。英作文ですね。えーと……。じゃあ、加藤くん。黒板に出てやってみて」

うなずき、教室の後方に座っていた少年が黒板にやってくる。優理の隣に立つ形になり、加藤の頬がリングのように紅に染まる。この爽やかなサッカー部の少年も、優理に惹かれていた様子である。

優理は深い焦げ茶色の髪をお団子にまとめあげていた。身長は百六十台半ばはゆうにあらう。男子生徒と並んでも低くはない。

オフホワイト色のツープースーツにスレンダーな身体を包んでいる。顔は小さな卵形。眉は細く整えられ、目はやや吊りあがりぎみのアーモンド形。瞳は円らで明るい鳶色。鼻筋は綺麗に通り、小鼻のふっくら実った高い鼻の頭を形成している。唇はぽつりして、肉厚だろうか。唇はローズピンクに彩られていて、その右下には小さなほくろがある。

白いブラウスを盛り上げる胸乳は随分大きなサイズ。おそらくは九十センチ台はあろう。高校生男子の目には少し毒だ。彼女が動くたびに、ゆさ、ゆさ、と重たげに揺れうごくのだから。

スカートは膝丈で、その下から黒いストッキングに包まれた美麗な脚が伸びている。その脚も細すぎず、太くもなく、実に美しいラインを描いている。

加藤が英作文を終え、ちら、とグラマー担当教師を見る。涼しげな目が熱情に濡れるのを、優理はくすぐったい思いで見た。

「うん、正解。よくできています。戻って下さい」

加藤はどこか名残おしげに戻っていく。

優理は早速生徒が書いた英文をいろんな色のチョークを使い、解説した。

「……ということ、こういう英文になります。次は分詞の副詞的用法で……」

と、ここで授業終了を告げるチャイムが鳴る。

「では、ここまで。言われた課題、しっかりやって下さい」  
教壇を降り、教室を出ていくとき、はあ、と切なげなため息が後ろで漏れた。

職員室に戻り、課題のプリントの作成をしていると、声をかけてきた者があつた。

「いやあ、小宮先生、相変わらずお美しいですねえ」

低いダミ声に、優理の眉がひそめられた。

振りかえると、そこにグレイのジャージを着た野田誠二郎のだせいじろうが湯のみ茶碗を持ち、にやにや笑っていた。

身長は百六十前後、優理からは見下ろす形になる。頭はだいぶ禿げており、前髪はなく、側頭部に毛を残すのみ。艶々と頭頂部が照っている。眉はゲジゲジで太く濃く、腫れぼったい臉に細い目、瞳はどこか灰色がかって見える。鼻筋は低くつぶれ、鼻翼は横に広がって形が悪い。赤紫色の唇はボテ、と分厚い。頬はだいぶたるみ、緩み、ブルドッグを想起させる。

胸板は厚く、おなかもでっぱって、見事な太鼓腹。ジャージの袖をまくりあげ、現れた二の腕は体毛に覆われている。手は丸々肥えて、指は短い。爪は黄土色ぎみで伸びている。よく見れば、少ない頭髮にも白い粉のようなふけが散らばっている。

「お茶、淹れていただけませんか」

「ご自分でなさって下さい」

優理は毅然と言い放つ。わたしはお茶汲みのOLなのではないのだから。

「冷たいですねえ。そんなに冷たくしないで下さいよ。同じS学院の教師じゃないですか」  
そつと野田が近づいてくる。鼻先に異臭が漂う。

野田はS学院の体育教師だった。部活は男子バスケット部を担当している。部員からも他の校内の生徒たちからも、嫌われている。体育の授業などでは、男子生徒に厳しく、怒鳴ったり、平手打ちにすることも多々あるという。その代わり、女子には甘いということだが……。

年齢はよく知らないが、五十歳くらいだろう。独身で、浮いた話ひとつ聞かない。このような不潔でガサツな性格では、恋人などもできなかつただろう。

ぼん、と肩に手を置かれた。ゾクツと寒気が背筋を走った。思わず、肩をぴくん、とひきつらせる。思わず、振りかえった。野田が顔を近づけてきている。ぷはあ、と口からきつい臭気が漏れる。花瓶の底に溜まった水の匂いのようにでもあり、汚物の臭気にも似ている。つい、吐き気がこみあげてしまいそうだった。口から、黄ばんだ歯が覗く。奥のほうは、歯がない。上下の前歯は入り乱れて生えており、実に歯並びが悪い。

（なんてデリカシーのないひとなの。本当にこのひと、S学院の教師なの……？）

東大を始めとして、難関大学に多数合格者を輩出するS学院は地域でも名門高校として通っている。部活も盛んで、野球部も西東京予選ではベスト4か8には食い込む。サッカーも同様で、剣道部などは、インターハイに出たことも何度かある。そんな高校に、このような不潔な教師がいることが全く信じられない。

他の教師は見て見ぬふりをしている。間の悪いことに、教頭などはいず、若い教師が数人いるだけだ。彼らは、何かというとすぐ大声を出す野田に注意をすることができないのだ。「今、何をされているんです？」

「課題のプリント作りです。見ればお分かりになるでしょう」

「ふふ。気の強い。そういう小宮先生も好きですよ」

またもや、むはあ、と腐敗物にも似た口臭が吐き出される。鼻をつまんでしまいたくもなるが、そんなことをすれば、野田の逆鱗に触れかねない。

「用がないなら、お戻り下さい」

「用はありますよ。小宮先生、今度の土曜か日曜、空いていますか？ いいレストラン、見つけたんですよ」

一体、この男は何を考えているのだろう。優理は眉をひそめたまま、五十の体育教師を見返した。

「空いていません。空いていても、野田先生と食事をするつもりはありません」

「こりやますます面白い。へえ、僕とデートしないとおっしやるんですか」

「前からそう申し上げているはずですよ」

優理はパソコン画面に視線を戻し、キーを打ちはじめた。空欄に助動詞を入れる文法問題を作っていく。黒いキーの上を蝶のように、白く細い指が躍る。カチャカチャと小気味よい音が鳴った。

野田は以前から場所をわきまえず、優理を口説いてくる。職員室だろうが、生徒が行きかう廊下であろうが、関係ないようで、その神経を疑ってしまう。口説く、といつても、気のきいたせりふを言うわけではない。ただただ野蛮に付きあってくれたの、デートしてくれだのと、ダミ声で言ってくるだけ。

「ふうむ。じゃあ、どうしたら、デートしていただけるんですか？」

「ちよつとつ。近寄らないで下さい。他の先生方が誤解します」

「僕は誤解されてもいいんですけどなあ」

耳元にまで顔を寄せてくる。優理は腹が立つてきた。再び振りかえり、きつい口調で釘を刺す。

「何百回でも言いますが、わたしは野田先生とお付きあいするつもりはさらさらありません。わたしには、ちゃんと交際しているひとがいるんです」

職場でこのような私的なことを口にするのはばかられたが、野田を諦めさせるには、

これしかないと思った。

「へえ。そうですか。この学校の教師ですか？」

「違います。詳しくは言えません。早く持ち場に戻って下さい」

野田は呆れた表情で肩をすくめ、背を向けた。

優理は深いため息をつき、パソコンに顔を向けた。

（これ以上誘ってくるようだったら、教頭か校長先生に言うしかないわね。恥をさらすよ  
うで厭（いや）だけども）

野田のやっていることは完全にセクハラ行為なのだから、場合によれば、謹慎処分から  
いにはしてくるかもしれない。

「あ、ああ、<sup>つかさ</sup>司さん……。ああ、いいわ」

薄暗がりのベッドで、優理は秘めやかな喘ぎを零した。都内のシティホテルだった。恋  
人と青山のレストランで食事をしたあと、ここにやってきたのだ。

大学時代の同期で恋人の相沢司は熱心に秘華を舐めまわしている。ざらついた熱い舌の  
感触に、甘い痺悦が腰椎にまで響いてくる。ときに舌が肉豆を撫でると、びくん、と細腰  
をはねあげさせてしまう。じゅん、と愛蜜が零れていく。

きゅ、とシーツを掴む。白い布地に深い皺が刻まれ、衣ずれの音がかすかに耳に届いた。

「いや、やめて……やめて下さい。乱暴はよしてっ……」

「じゃあ、素直になれ。ほれ、ペロ出してみる」

「おずおず舌を出す。と、すぐさま舌を捕えられた。」

じゅるる。じゅちゅう。じゅるるる。じゅるるるん。べろべろるん。れろろろるん。

唾液が流れ込み、飲み込まずにはいられない。汚臭がのどを刺激する。男の舌は赤紫色でザラザラしている。しかも、ディープキスはひどく卑猥だった。ねっとり舌肉全体を絡みつかせ、唾液音も高らかに、吸ってくる。

（いやああ。やだ、やだあ。気持ち悪いいいい）

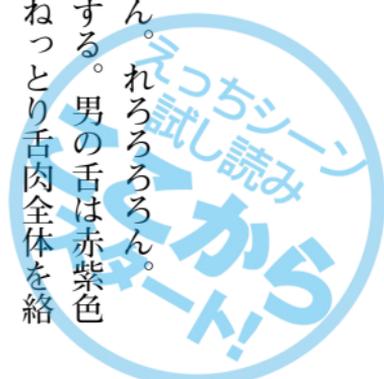
優理の目尻から涙の雫が溢れた。背筋を冷たい戦慄が駆け抜ける。怖い。気持ちが悪い。悲しい。悔しい。それらの感情が一気に押し寄せ、胸を苦しくさせる。

「ぐへへ、たまんねえぜ。学院一のアイドル先生とキスできるなんてなあ。ぐへへへ」

鼻をぶひひと鳴らし、脂汗に額をぬめらせながら、野田はなおも舌を挿しいれて、美教師の舌を味わう。

（ああ、そんなこと、しないで）

舌がふ、と離れ、菌莖を舐めてくる。菌莖を這うナメクジのような軟体感触に、汚辱感が突き上げる。早く逃げ出したいが、身体は硬直し、指一本動かせる気もしない。心臓の音がうるさい。相手にも聞こえるのではないか、と思うほどだ。



(誰か……誰か助けて。お願いっ)

しかし、ここはめったにひとの通らない南館三階だ。願いは届かないだろう。

歯茎をたつぷり舐められ、また舌を絡めとられる。舌先をつつきあわせ、舌側面を交わらせ、舌先を細かく動かしてくる。

(うう……いやあ。なんていやらしいの)

司とキスしても、ここまでねちっこい大人の口づけはしない。軽く舌を絡ませるだけだ。そもそも、司はすぐにセックスしようとするので、キスはせいぜい一分か二分交わすだけだった。嫌悪すべき野田とキスしている、その心理効果もあろうが、もう十分も二十分もキスしているような気がしてくる。

しばらくして、男の武骨な手が胸に触れてきた。身体がびくんっ、とした。

(触らないでっ。ああ、怖い)

しかし、男はただ五本指を伸ばして胸乳の膨らみを覆っているだけだ。軽く上下に揉むが、あまり力が入っていないようである。意外な優しさに、優理の心は乱れる。

(この男は犯罪者なのよ。すぐに乱暴してくるに決まってるわ)

そのときを思うと、恐怖で息苦しくなる。脳髓にまで染み込むような恐ろしさだ。しかし、今のわたしは籠に捕えられた小鳥も同然、逃げられやしない。

どのくらい時間が過ぎただろうか。男が口を離した。透明で粘っこい唾液の糸が三本、

ふたりの舌をつないでいた。やがて、ぷつん、と糸は切れた。

「ふへへへ。どうだ？ 少しは気分が出てきたか？ おう？ 素直に言ってみろや」

「そんなこと、絶対にありません」

涙目で睨むが、かえってその目つきが獣欲をそそのめるのか、嬉しそうに鼻を鳴らす。

「まあいい。たっぷりかわいがってやるよ。へへ、俺好みの牝奴隷に育ててやる」

おぞましい言葉に、息も飲めない。

野田は立ち上がり、ジャージズボンを脱いだ。慌てて目を逸らす。ブリーフを脱ぐ音もした。暗い予感に胸の底まで冷えていく。頬が青白くなつていくのが分かる。

「ほれ。こっち向け。ちんぼしゃぶれや」

「いやです……」

「おとなしく言うことを聞け。俺の命令を聞かんとどういうことになるか、分からんのか？」

「訴えます。これは犯罪です。強制わいせつ、いいえ、準強姦です」

「うるせえっ！」

頬に熱が弾けた。目を見開き、野田を見上げた。五十の禿頭体育教師が眉を吊り上げ、にくにくしげに美教師を睨みつけている。

「貴様、まだ自分の立場が分かっていないようだな。不倫の過去をバラされたら、この

学校にいられないぞ。他の学校にも入れないようにしてやる。こっちには、いろいろ人脈があるんだ。見くびらないほうがいいぜ？」

血走った目で睨みつけられ、低い大声で言われれば、蛇に睨まれた蛙も同然、もはや、言うことを素直に聞くしかない。

（あ、ああ、こんなに大きいのか……？　口が壊れちゃう。すごく気味が悪い）

眼前に迫った肉幹は、恋人のそれよりひと回り大きいサイズに見えた。あまりの恐怖・不安のために、そう見えたのかもしれない。実際に巨大なのかもしれない。ともかく、指で包むこともかなわなそうな巨幹っぷりだった。亀頭肉は色素の沈んだ赤黒で、カリはやたらと高く張って見える。太い剛幹には鳶のように血管が這いまわり、ある意味、蛇のようにも見えた。

そのおぞましい様に、のどが渇き、背中が凍りついた。金縛りに遭ったように、脚が動かない。

「さあ、しゃぶってもらおうか。優理先生。唾たつぷり出して舌を使うんだぜ」

野田が二本目の煙草に火を点けながら、笑った。

（すぐに出させればいいんだわ。男のひとは出せばおとなしくなるから）

覚悟を決めた。ひざまずき、右手で鋼幹に触れ、赤黒い亀頭肉に舌先をあてた。ちろちろ、と舐める。

南館三階の大会議室で体育祭実行委員会が行われていた。本日の優理は髪をシニヨンにまとめ、黒いスーツ姿だった。スカートは丈がやや短く、膝上五センチほど。「……というところで、今からわたしたち教師が仮に決めた競技を発表します」黒板に向かい、優理がチョークを走らせはじめた。100メートル走、クラス対抗リレー、障害物競走、騎馬戦、玉入れ。

会議室を振りかえり、優理が言葉を続けた。

「何か他に案はありますか？ あつたら言つて下さい。遠慮はいりません」

室内には、三学年・各七クラスずつ、計21クラスの実行委員たちが集まっていた。男子と女子、ほぼ半々である。長机が五列並び、それぞれに生徒たちが席についている。

男子も女子も、ほとんどがぼうっと優理を眺めている。憧れの想いを込めて見つめる男子、半ばやつかみの気持ちも込めて眺める女子……。みな、優理には応えず、発言する者はいない。

優理はふう、とため息をついた。特に競技には不満はないのだろうか。そう思った瞬間だった。びくん、と身体が震えた。

(いや、こんなときにつ……)

尻穴奥に埋め込まれたアナルパイプがゆっくり振動する。その動きに、妖しい感覚が芽生えるのを抑えることができない。会議室の後方、パイプ椅子に腰かけ、週刊誌を読んで

いた野田がちら、とこちらに顔を向け、卑猥な笑みを口元に浮かべた。彼の右手には小さな長方形の板が握られていた。リモコンだ。

(生徒がいるというのに、あの男は一体何を考えているの)

改めて怒りが湧きあがってくる。シャワー室でアナルセックスをして、絶頂に至った、その屈辱の日から一週間と過ぎていない。あれ以来、職員室で声をかけてくることはなかったが、いつも野田に監視されているようで、落ち着かなかった。

自分が嫌でたまらなかつた。この野蛮で不潔で、およそ教師にふさわしいとは全く言えぬ男に、あろうことかお尻を許し、アクメに昇りつめたなど、あつてはならぬこと。悔しくて、悲しくてたまらなかつた。しかし、野田の蛮行を校長に訴えることはできなかつた。そんなことでもしたら、破廉恥な口唇愛撫の写真をバラまかれてしまう。

「何か意見はありませんか？」

深く呼吸し、息を整えてから訊いた。バイブの振動はやんでいた。

「ありません」

ひとりの女子が返事をした。

「分かりました。では、競技についてですが、これで行きたいと思います。100メートル走も、リレーもクラス対抗にして、予選、決勝、と進めると面白いと思いますがどうですか」

「またもや、沈黙。S学院は進学校であるためか、体育祭にはあまり乗り気ではないと、他の教師から聞いたことがある。やはり、実際、勉強していたほうが落ち着くのかもかもしれない。」

「まず、予選も二回か三回に分けて……ひゃうっ!？」

「またもや、アヌスバイブが振動した。さきほどよりも、強めの振動だ。」

「(い、いやっ……やめてえ……。みんなに気づかれちゃう)」

「ぶるぶる脚が震えた。うなじに冷たい汗が浮かぶ。腸管に刺さった淫具はタコのようにうごめき、尻穴と腸壁に切ない快感を与えてくる。その快感はまださほど強いものではなく、生温かい官能信号が鳴りひびき、ゆったりと結腸にまで及ぶようだった。」

「女教師はきつ、と不潔な体育教師を睨みつけた。禿げかかった頭の体育教師は素知らぬふりで週刊誌を見ている。」

「バイブレーションがようやくおさまり、ほう、と息をついた。」

「予選も二回か三回に分けて行おうかと思いますが、それだと時間もかかりますから、一発勝負というアイデアもあるかと思えます。または、競技数を減らすか……」

「すると、一番前に座るめがねの女子生徒が意見を言った。」

「予選は一回でいいんじゃないですか。何回にも分ける必要はありません。一発勝負だと盛り上がりにかけるし……。予選一回、決勝一回でいいと思います。」

「そうですね。そうしましょう。時間はなんとか調節できると思っています」

すると、またもやパイプが暴れはじめた。さらにきつい振動に、「あ、あ、あ、あ」と美人英語教師は声を漏らし、頬を染めた。机に手をつき、膝を曲げ、腰を後ろに突き出すようにして、脚を細かく痙攣させた。

眉を緩やかに垂らし、黒い瞳を潤ませ、髪の毛を頬に一本張りつかせた。

「どうしたんですか、先生」「おいおい、大丈夫かよ」「なんか変じゃない?」

生徒たちがざわめきはじめた。大丈夫だと、返事をしようとしたが、激しい振動はやまない。突き上げるような麻薬的快感が容赦なく若い女体を襲う。一回、二回、三回と痺悦激流が腰、背中を貫いていき、なぜだろう、子宮口にも飛び火し、ズキ、ズキ、と高温に疼く。

「ん、ん、あ、あ、ん、らい……じよう、ぶ、う、う、うううう」

とうとう机に突っ伏し、お尻を後方に突き出して、震える。ローズピンクの果肉唇から火のような息を吐き、白く濡れた歯を零す。

「先生、具合、悪いんですか?」「なんか色っぽくね?」「ああ、たまんねえ。小宮先生、こんな声出すなんてな」

生徒たちが椅子から立ち上がり、優理に寄ってくる。

(お願い、来ないで。お願いいいい)

優理はびく、びくん、と腰を震わせていた。バイブ振動はやむことはなく、激しく女体を攻めたててくる。脂汗に額をぬめらせ、まつ毛をそよがせ、黒い瞳を潤して、顔をあげる。気がつけば、野田が立っていた。生徒は野田から離れ、席についていく。

「小宮先生は具合が悪いようだ。すまない、みんな、今日は解散だ」

野田は野太い声で言うのと、優理に肩を貸し、会議室を出ていった。

「ちよつと。やめて下さい、こんなところで……。誰か来たらどうするんです。北沢先生きたざわとか」

保健室のベッドに押し倒され、優理は悲鳴じみた声をあげた。北沢はS学院の保健教師で、四十代のめがねを掛けた気のいい女性だ。

「へへ。北沢さんはもう帰ったよ。確認しておいたからな。さあ、ケツまくってみな」

「い、いやつ。もうこんなこと、終わりにして下さい」

ふたりがいるベッドは、カーテンが掛けられ、外からは窺うかがいしることはできない。万一、誰か生徒が来ても、やりすごせるかもしれないが、それでも落ち着かない。

「終わりにしてくれだど？」

野田が眉を吊り上げ、美人英語教師の頬を打った。小気味いい音が室内に響く。

「貴様つ。奴隷のくせに、主人に命令するのか。いつから、そんないい御身分になったん

だ？ ええっ？」

「あ、あう……すいません、ごめんなさい。ああ、ぶたないで」

お団子にまとめた髪を掴まれ、ぐいぐい揺すぶられ、めまいに襲われた。頬がひりひり痛い。

「謝る暇があつたら、さつさと脱がんか、牝豚がつ」

体育教師の威嚇に、優理はシーツに顔を突つ伏してすすり泣いた。

（もうだめだわ。この悪魔からは一生逃げられないんだわ。ごめんなさい、お父さん、お母さん）

優しく真面目な両親の笑顔が浮かぶ。胸が痛い。まさか、自慢の娘が職場で体育教師に脅され、乱暴されているとは思えない。

鼻をすすりながら、ジャケットを脱ぎ、ブラウスのボタンをはずす。指が小刻みに震える。野田がじつと見ていると思うと、それだけで、冷たい恐怖・不安が胸を息苦しくさせる。上半身裸になり、ベルトを緩めてスカートも脱ぐ。パンティに指を掛けたところで、野田がズボンとブリーフを脱ぎ、ペニスをむき出しにしているのが視界に映り、生唾を飲んだ。わたしのアヌス処女を奪った恐ろしい肉の凶器。怖くて、おぞましくて、それでいて、どこか懐かしく、欲しいと思ってしまう。またお尻にぶち込んでほしいと。

（何を考えているの、わたしだったら。こんな悪魔に屈したら駄目よ）

自らを叱責しつせきしながら、薄布を足首から抜いた。

「よおし。へへへ。ケツに嵌めてやった道具を取り出してやらねえとな」  
仰向けにされ、脚を蛙のごとくに広げられた。屈辱に頬が火照る。と、同時に、どこか安堵する自分もいる。

小さくすぼまった菊口に指をほじりいれられる。ピリ、と走る痛みとともに、甘痒い感覚も生まれた。ずず、と淫具を抜き出された。抜き出されるとき、直腸が小さくうごめき、切ない感覚に震えた。

アヌスパイプを放ると、野田がのしかかってきた。肉槍が菊のすぼまりにあてがわれる。亀頭肉の、柔らかさと弾力を兼ねそなえた感触に、「ああ」と声をあげた。

ぬぶ。ず、ずず……ずぶう、ずぶぶう。

「あ、あ、あんっ」

びくん、と背中がのけぞった。髪の毛が何本かほつれて、濃桃色に上気した頬に絡まる。鼻筋脇に汗の細かい粒子が浮き、蛍光灯にその輝きを増した。ふつくらとしたマシユマロ唇が開き、白い歯と躍る桃色舌が覗いた。たぽん、とマスクメロンサイズの乳が揺れ、乳渓谷に落ちた影がダンスする。

「くひひ。いい塩梅だぜ。おお、締めつけてきやがる。たまんねえな。ちんぼが溶けちまいそうだぜ」

禿げた前頭部をテカらせながら、野蛮な体育教師は鼻の穴を膨らませた。ずぶ、と鈍い音がして、肉幹が根元までずっぽり突き刺さってきた。バチン、と巨大肉袋が尻肌にくつきり、揺れた。

「へへへ、どうだ、優理。あん？ 気持ちよかつたら、泣いていいんだぞ。ぐへへへ」  
「いや、そんなこと。馬鹿にしないで」

涙目で睨むも、軽く鋼幹前後シェイクされただけで、ゾクツと背筋が粟立った。菊門に生じた快感の泡は、すぐに巨大化し、腸管全体を麻痺させていった。その甘美刺激が脊髄を煮る頃、優理は眉を「八」の字に垂らしてのアへ顔をしていた。

「くひひ、いい顔だぞ、優理。生徒が見たら、どんな顔をするかな？ 卒倒するだろうな。お前のことを想ってセンズリかいていた猿どもはちんぽ勃起させちまうだろうな」

「ああつ。そんなこと、おっしやらないで。……あ、あ、あん、ん、ああ、や、やだ、動かないでえ」

シートを掴み、優理は唇をわななかせた。牡幹が数センチずつ前後に出入りするたびに、激しい快感が生じては小爆発を起こす。子宮に快楽熱は直結し、じゅくう……と蜜汁分泌に至る。盛大に咲いたラビア肉がとろとろに蜜にまみれて、赤紫色を濃くさせていく。

「おま〇こも濡らしちまいやがったか。とんだスケベ牝豚だ。清楚でお上品な小宮先生、どうしたんですか？」

野田のからかいに、美教師は涙ぐむ。顔を横向け、目をそむけ、息を弾ませる。

体育教師は円み乳を揉みながら、牡腰の動きを徐々に大ぶりなものにさせていく。五回、十回、二十回、と前後スライドされるたびに、腸管が妖しく蠕動し、脳にまで響く快樂熱波が生まれ、自らも腰振りダンスを見せしてしまう。

「あ、あ、ん、ん、い、いや、あ、あ、あ、ん、いい、いいの……あ、あ、あ、ん、野田、先生、ああ、気持ちいいですう」

「くひひ。お前は立派な牝奴隷だ。そうだな？」

「は、はい、わたしは、野田先生のお……め、牝、奴隷……れすううううう。うあああ」  
 もはや、自分でも何を言っているのか分からない。冷静な判断力もふつとび、ただただ、この素晴らしすぎる快樂に溺れていたいと、たふたふ巨乳を揺らし、女尻ダンスをかます。  
 「よーし。じゃあ、ご主人様と云ってみろ。忠誠を誓え」

唇を甘く吸ってから、額を汗にぬめらせて、野田が命令してきた。

「ご、ご主人様……。ああ、ご主人様あ。もつと、もつと突いて下さい。あうううう」  
 脳裏に白い火花が何度も散り、弾ける。突き込まれるたびに、強烈な肉悦が全身を突き抜けていき、びゅびゅー、と愛蜜を噴き出す。腰椎、脊髄、脳髓がただれたように熱くなり、煮えていき、肉体が溶けていくかのよう。

「うははは。ざまあ見ろつ。お前は俺のモンだ。学院一のアイドル教師をモノにしてやつ

たぞ」

吼えて、野田がガツガツ腰を遣ってきた。劇感がさらに巨大化し、強烈なものに変わり、美形英語教師は情けないアへ顔披露する。眉を垂らし、小鼻を膨らませ、涎を零して、舌をうねらせている。

「今度はま○こだ」

野田が直腸からペニスを抜くと、一気に肉腔にぶち込んだ。

「きやうううううううう」

まばゆい真つ赤な光が臉の裏でまたたき、優理の肉体が宙に舞い上がった。軽くイッてしまったらしい。

「おらおら、俺はまだだぞ。気持ちいいだろう。気持ちよくてたまらんか？ 軽蔑していた男にイカされるのはどんな気分だ？ ああ？ 牝豚がつ」

頬を軽くはたかれ、優理は涎を垂らして、歓喜の声をあげる。

「い、いいれす、いいれすう。おま○こ、焼けちゃう。ああ、溶けちゃう。あ、あ、あ、あ、野田先生のおちんぼ、最高すぎい……あ、あ、あうううう」

巨房乱舞に汗まみれになりながら、女教師は二度目のアクメへと。子宮内で弾けた劇悦電気はさらに巨大化し、脊髄から脳天にまで貫き、全身を液状化させていく。そのあとも、ぶちぶち……と身体のあちらこちらで快感小爆発が起こる。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**